

03 人々の暮らし

人々の文化や暮らしは、時代とともに様々な変化してきました。現在のアイヌ民族の生活―衣食住、社会のしくみや教育、仕事、遊び―は、日本に住む他の人々とあまり変わるところはありません。

独自の伝統・文化には生活から遠のいたものもありますが、アイヌ民族の誇りの源として大切だと考えるものについては、将来にわたり継承しようと積極的な取り組みをしています。

ここでは、近代から戦前にかけて記録されてきた生活文化を解説します。

01 着る

現在、和人が和服を着る場面がごく限られているのと同じく、日常生活の普段着として、アイヌ民族独特の装いをすることはありません。いっぽう、自らのアイデンティティを示すものとして大切にされ伝統的な儀式を行うとき、歌や踊りを披露するとき、あるいは卒業式や結婚式、仕事のプレゼンテーションを行うときなどには、独特の刺繍を施した着物や装飾品で正装して臨む人もいます。そのため、家族や自分が着るための晴れ着は現在でも作られています。近年の晴れ着は、主に木綿を素材に作られています。

かつて、衣服の素材には、獣の皮、サケなどの魚の皮、オヒョウやシナノキなどの樹皮の繊維、イラクサなどの草の繊維などが用いられました。樹皮の繊維は、山から立木の樹皮を剥がし、細く裂いて糸を作り、機織りで反物にして着物のかたちに縫い合わせ、そこに木綿の布や糸で刺繍を施して仕上げます。こうした自然素材の着物の製法を維持するには、素材の入手、処理、保管から制作まで人手と手間、場所を要します。さらに、素材を安定的に入手するには環境の維持や、採取を容易にする制度的なサポートが必須です。

刺繍の様様は、装飾と補強を兼ねています。また、胆振・渡島地方の一部では安全を願う思いを込めている場合もありました。50年ほど前に研究者がこのことを紹介すると、こうした解釈が人気を博し、現在ではこのような説明をしている作家も少なくありません。このほか、現在では普段持ち歩くための手提げ袋や小物入れなどにも施され、生活の色々な場面で楽しまれています。

02 食べる

かつて食料の多くを自然の恵みに頼っていたアイヌ民族の生業は、安定的な食料の確保のため、狩猟・漁撈・山菜採集・農耕など調達方法をいくつにも分散していました。狩猟・漁撈は主に男性の仕事、山菜採集・農耕は女性の仕事とされますが、状況に応じ男女が協力して行うことも珍しくありません。

狩猟は、陸獣ではヒグマやエゾシカなど大型の獣からエゾテンやエゾウサギなどの小動物が、海獣ではクジラ、イルカ、アザラシ、アシカ、トドなどが利用されました。これらは動物の習性を利用して捕獲し、食用にするとともに、生活用品に加工したり交易用に使われました。

漁撈で得られる魚のなかで、サケは最も重要なものです。秋に川を遡上してくるサケは、大量に捕獲され、その多くは保存食料として蓄えられました。ワカサギやコマイなどは冬季の凍結した湖沼でも捕獲でき、貴重な食料となりました。海では、カジキ、カジカ、マンボウなどを利用し、貝類やウニ、タコ、イカ、ナマコなども食用にしました。トラヤサメは肝臓から抽出する油を調味油や灯火用に利用しました。

山菜は、大きく葉や茎を利用するものと、根を利用するものに分けられ、食用のほか、薬用としても使われました。湖沼では、コウホネの根や、ヒシの実を採取して利用しました。

農耕は、ヒエ・アワ・キビなどの栽培が中心であり、またジャガイモが伝わりと盛んに利用しました。特に、寒冷な気候を利用して加工するシバライモは、《ヤウンモシリ》（北海道）および本州の一部の寒冷な地域で見られる保存法で、原産地であるアンデスでの保存法との類似が目立ちます。

こうして得られた穀物は日常の食料のほかに、醸造酒を作るための材料としても利用されます。

調理法は、煮る・茹でる・焼く・蒸す・炒める・揚げる・干す・凍結させるなどの方法で、また新鮮なものは生のまま素材の風味を生かして調理されます。

普段の食事は肉・魚・山菜などを煮込んだ汁物《オハウ》とさっぱりした穀類の粥《サヨ》で、これに季節の味覚を楽しむ副菜がつきます。儀式の際には、供え物として特別の料理が作られることもあります。

現在のアイヌ民族の食糧事情は国内の他の人々と同じですが、伝統儀式用として、また健康を維持するため、さらには何よりその料理が美味しいという理由で

現在でも作られているものがあります。家庭の味として思い入れのある食材・料理を通じて、自然の食材を手に入れ調理・加工・保存するかつての知恵や技術とともに、自然の恵みを尊ぶ精神も伝えられています。

また、手に入りやすい食材に変えて作られる料理や伝統食材を用いた新しい調理法も工夫されています。

03 よみがえる「イオル」

アイヌ民族の伝統的生活空間「イオル」の再生とは、森林や水辺などにおいて、アイヌ文化の保存・継承・発展に必要な樹木、草木等の自然素材が確保し、その素材を用いてアイヌ文化の伝承活動などを行う空間を形成することです。「イオル」は、アイヌ語で狩場を意味する《イウォロ》(生活圏)に由来し、行政上で用いられている言葉です。

2006(平成18)年に白老町で再生事業が開始されたのを皮切りに、他の地域でも事業が展開され始めています。自然とのふれあいはもちろん、工芸実習や体験交流など、アイヌ民族の文化的な営みを体感することのできる空間でもあります。(イオルの再生について85頁を参照)

04 アイヌの植物利用～薬用を中心に～

イケマ (アイヌ語名：イケマ/イケマ/ペヌフ)

ガガイモ科のつる性多年草で、《ヤウンモシリ》(北海道)～九州、南千島、中国に分布します。根を食用とするほか、薬用として、下痢、腹痛、虫下しには根を生のまま服用し、頭痛には焼いて布に包み頭にあて、歯痛にはこれを噛み、切り傷、化膿防止には煎汁で患部を洗うほか、打ち身、眼病などにも用いました。また、霊力のある植物と考えられていることから、魔払いなど呪術にも用いられました。漢方では根を牛皮消根(ゴヒショウコン)と呼び、利尿、強精、強心薬として利用されます。



エゾトリカブト/オクトリカブト (アイヌ語名：スルク/スルク)



キンポウゲ科の多年草で、毒性の強い植物として知られ、主として塊根を狩猟の際の矢毒として使用したほか、薬用としては塊根エキスをリュウマチ、顔面神経痛、その他の神経系等の諸病に塗布しました。漢方では塊根を附子(ぶし)、烏頭(うず)と呼び、強心、鎮痛などに利用されます。トリカブトに含まれるアルカロイドの成分であるアコニチンには青酸カリの百倍近い毒性があるといわれ、呼吸中枢麻痺や心臓障害、運動神経の麻痺などを引き起こし、中毒死することもあります。

オオウバユリ (アイヌ語名: トウレフ/キウ/エラバシ/ハル)

ユリ科の多年草で、鱗茎はユリ根と同じく幾重もの鱗片からなります。花をつけない株の鱗茎を6月下旬から7月初旬にかけて掘り、でん粉に加工したものを腹痛や下痢などの薬として用いました。オオウバユリの鱗茎はギョウジャンニクと並んで《ハルイッケウ》(食糧の背骨)つまり「食の中心」といわれるくらい、アイヌ民族の食生活にとって大変重要な植物で、でん粉に加工する他、発酵させるなど、その利用や保存方法には独特なものがあります。



ガマ (アイヌ語名: シキナ)



ガマ科の多年草で、穂の部分をお焼きにして油と混ぜて練り、おできの薬として用いました。漢方では花粉を蒲黄(ほおう)と呼んで下血、吐血に用い、全草を香蒲(こうぼ)と呼び、利尿や浮腫などに用いました。ガマの葉は主として蓼蔴(ござ)の材料として用いられるほか、花穂をほぐして綿の代わりとして敷物などに利用しました。

ギョウジャニンニク (アイヌ語名: プクサ/キト/キト)

ユリ科の多年草で、葉や茎を乾燥させて保存し、薬用として風邪や結核、脚気など殆どの病気に煎じて服用しました。また、火傷や凍傷、痔、打ち身、股部白癬などには煎汁で患部を洗浄し、温湿布をするなどして利用しました。食用としては汁の実や《ラタッケナ》(和え物)、ご飯に炊き込むなどします。ビタミンの含量の高いことが明らかとなっている植物です。強い臭気が特徴的で、伝染病や風邪などの病気が流行した際には病気の神がこの匂いを嫌うとして魔除けに利用されます。



クサノオウ (アイヌ語名: オトンブイキナ)



ケシ科の越年草で、薬用として便秘の際に茎葉を煎じて服用し、あるいは肛門に茎を差し込むなどして用いました。痔や婦人病には茎葉を煎じて服用するほか、煎汁で患部を洗うなどして利用しました。茎や葉を切ると黄色の液汁が出ることから《オトンブイ》(肛門)《キナ》(草)、また、痔や便秘の薬として用いることからこの名で呼ばれるのだといいます。漢方では白屈菜(はくくつさい)と呼ばれ、全草を煎じて、湿疹などの患部を洗うのに用いられるほか、生の茎葉の絞り汁や花期の葉を細かく刻み、焼酎に漬けたものを打撲、腫もの、虫刺され、疥癬などの患部に塗布します。和人には有毒植物として扱われているため、内服には注意が必要です。

クロユリ (アイヌ語名：アンラコロ/ハンタコロ/ハハ)

ユリ科の多年草で、鱗茎から澱粉を採り、消化器疾患、特に下痢や胃部及び上腹部に疼痛を伴う症状に用いました。食用としては、葉は汁の実、鱗茎は茹でてアザラシの油や魚油をつけて、鱗茎の鱗片を米と一緒に炊き込んだり、澱粉を粥などに入れて食べました。葉を絞った汁で文身(いれずみ)の染料としても用いられたと言います。和人は良質な澱粉を片栗粉の原料とし、鱗茎から澱粉を採り、すり傷、腫れもの、湿疹の薬として利用するほか、葉、鱗茎を食用としました。



コウライテンナンショウ (アイヌ語名：ラウラウ)



サトイモ科の多年草で、別名、蛇の松明(たいまつ)とも呼ばれます。胃痛や、腹痛には果実を用い、神経痛やリュウマチ、打ち身などには塊茎の有毒部分を取り除くなどしてすり下ろして、布などに伸ばし患部に貼り用いました。食用としては、秋、果実が赤くなってから塊茎を炉の灰の中に埋けて焼くか、鍋で蒸すなどして食べました。漢方では塊茎を天南星(てんなんしょう)と呼び、去痰、鎮痙薬として各種処方に応用され、民間では腫れものなどの吸い出し薬として利用されます。

チョウセンゴミシ (アイヌ語名：フレハツ/レフニハツンカラ/レヘニハハ)

マツブサ科のつる性落葉低木で、蔓を煎じて風邪薬や解熱剤、船酔いなどに服用し、眼病の際に患部を洗浄しました。また、神経痛の際には蔓を風呂に入れて沸かして入るなどし、果実は煎じて咳止めとしました。食用としては果実を生食し、団子や魚などのつけ汁とし、蔓を粥に入れて食べるなどしました。蔓、果実とも煎じてお茶としても飲みました。漢方では果実を五味子(ごみし)と呼び、咳止め、滋養強壮に用いました。果実は食べると甘さ・酸っぱさ・辛さ・苦さ・鹹(しおから)さの五つの味がすることから、この名がついたといえます。



ナギナタコウジュ (アイヌ語名：エント/セタエント)



シソ科の一年草で、花穂の形が薙刀に似ており、中国の香薷(こうじゅ)に似ていることからこの名がついたといえます。茎葉を煎じて風邪や二日酔いの際に薬用として用い、また、粥の香りづけに入れて炊くほか、日常のお茶としても飲みました。ナギナタコウジュには強い臭気があることから、病魔を遠ざけ、常用すれば体を健康に保つことができると考えられていたといえます。漢方では香薷(こうじゅ)と呼ばれ、解熱や発汗、利尿の効果があることから、風邪、腹痛、神経痛、リュウマチなどに用いられます。

ミズバショウ (アイヌ語名: パラキナ/バラキナ/イソキナ)

サトイモ科の多年草で、別名ヘビノマクラとも呼ばれ、白い仏縁苞（ぶつえんほう）が特徴的です。葉を腫れものやおできに貼って膿を吸い出し、足の水疱には温疱にするほか、発汗剤としても用いました。根は乳房炎の際にすり潰して塗りました。漢方では根茎を海芋（かいう）と呼び、便秘、発汗、急性腎炎、痔などに用いられます。毒があるため人間は食べられません、ヒグマは冬眠で硬くなった便を排泄するためにこの茎を好んで食べます。



ヨモギ/エゾヨモギ/オオヨモギ/ヤマヨモギ (アイヌ語名: ノヤ/ノヤ/カマルサ)



キク科の多年草で、葉を揉んで傷口に当て止血に用い、葉を煎じて咳止め、虫下しとして服用しました。虫歯には葉を塩で揉んでその絞り汁を患部に用い、喉の痛みには葉を煮立ててその湯気を吸い、枯れ葉を揉んでモグサとしても用いました。オトコヨモギ、シロヨモギも同様に用いられ、食用には若葉を粟や米などに混ぜて《ノヤシト》(ヨモギ団子)にしたり、刻んで粥にふりかけて食べました。また、ヨモギには強い臭気がある

ことから、茎を束ねて作られた人形は非常に強い神と考えられており、人間の手に負えぬ悪神や魔物を退治するものだといいます。

05 アイヌの植物利用～樹木～

イチイ (アイヌ語名: ララマニ/ララマニ/クネニ (木) /アエッポ (実))



イチイ科の常緑樹で、別名オンコとも呼ばれます。果実を脚気の薬や利尿剤として用い、内皮を煎じて下痢止めの薬としたほか、葉の黒焼きを煎じて肺結核咯血に服用しました。果実は生食し、健康にも良いとして肺や心臓の弱い人には大いにすすめたといえます。民間では葉を一位葉 (いちしよう) と呼び、利尿、糖尿病に用い、果実を咳止めや下痢止めに用いました。イチイは弓やカンジキの材料

として利用されるほか、彫刻の材料として広く利用されます。内皮は染料として利用され、《アットゥシ》(樹皮衣)などの韌皮繊維を赤く染めるのに用いられます。また、有名な飛騨高山の一位一刀彫に使われる材料のイチイは《ヤウンモシリ》(北海道)産のものが多く使われています。

イヌエンジュ (アイヌ語名: チクペニ)

マメ科の落葉樹で、一般にエンジュと呼ばれますが、本来のエンジュは中国原産です。この木の発する強い臭気を悪神が嫌うと考えられていたことから、流行り病などがあると戸口や窓口などに吊るして病魔除けとしたほか、《イナウ》(木幣)も作られました。また、家の柱や器具などの材としても多く使われ、現在では、木質が彫刻に向いており、白と茶色のコントラストがアクセサリーなどの土産品を引き立たせることから、材料として多く利用されています。



エゾマツ (アイヌ語名: スク (木) / スク (木) / スクヤラ (樹皮) / メチロホ (根))

クロエゾマツとも呼ばれるマツ科の常緑樹で、傷口に樹脂を塗りつけ、風邪の際には葉を鍋で煮て、その汁を衣服につけて臭いを嗅いだといわれ、臭気が病魔を払うと考えられていたことからだといわれます。矢柄として用いられるほか、《トンコリ》(五弦琴)などの楽器の材としても使用されました。樹皮は屋根や壁を葺く材として使われ、根は曲げ物などを綴じるのに利用されます。枝が垂れ下がったように伸びるのが特徴です。



オヒョウ (アイヌ語名: アッニ / アハニ)



オヒョウニレとも呼ばれるニレ科の落葉樹で、《アッニ》は繊維を取る木の意味で、アイヌ衣服の代表的な《アットゥシ》(樹皮衣)の材料となります。春先、樹皮を剥ぎ、内皮を温泉や沼などに2〜3週間浸けるなどして繊維をとります。繊維は細く裂いて軽く撚りを掛け、結んで糸を作り、機に掛けて反物を織ります。このオヒョウの反物も《アットゥシ》(樹皮衣)と呼び、交易品としても使われました。

カツラ (アイヌ語名：ランコ)

カツラ科の落葉樹で、高さが20～30mと比較的真っ直ぐに伸び、幹周が1～2mと太いことから、丸木舟の材料として使われるほか、臼や杵、まな板、お盆などの生活道具の材料としても多く使われました。また、樹皮を黒色に染める染料としても使われたほか、この木の灰を煮た上澄みを洗髪にも利用しました。《ランコ》は蘭越などの地名の語源ともされています。



キタコブシ (アイヌ語名：オプケニ/オマウクシニ)



モクレン科の落葉樹で、風邪や伝染病の際に樹皮や枝を煎じて服用したほか、怪我には木の削り屑で温湿布として使用しました。樹皮を煎じたものをお茶として日常的に飲まれました。漢方ではつぼみを辛夷(しんい)と呼び、鼻炎や蓄膿症、頭痛に用います。この木の皮を剥ぐととても良い香りがするので《オマウクシニ》(良い香りのする木)と呼ばれますが、天然痘などの伝染病が流行するときはその香りに誘われて病魔がやってくると考

えられたことから、病魔を避けるために故意に《オプケニ》(放屁する木)と呼んだといえます。

キハダ (アイヌ語名：シケレベ (実) / シケレベ (実) / シケレベニ (木) / シケレベニ (木))

シコロとも呼ばれるミカン科の落葉樹で、11月頃の霜が降りる時期に果実を採取し、薬用、食用としました。果実を煎じて、喘息や風邪、胃痛、痔などに服用し、しもやけには、果実とサイハイランの根を磨り潰して用いました。内皮は胃の薬として煎じて服用したほか、打ち身や腫れものにも煎じて用いました。黄色い内皮は漢方で黄柏(おうばく)と呼ばれ、食中毒、食べ過ぎ、打ち身、捻挫、突き指、水虫、口内炎に用いられます。

食用として、果実を《ラタツケナ》(和え物)の材料として用い、豆やトウモロコシ、カボチャなどと炊き合わせて食べます。また、この木は儀礼の際に神へ捧げる《イナウ》(木幣)の材としても使われました。



タラノキ (アイヌ語名：アユシニ / アイコロニ / エネンケニ)



ウコギ科の落葉樹で、胃痛や糖尿病に良いといわれ、根を煎じて服用しました。若芽は汁の実などにして食べました。民間薬として根皮を櫛木皮(そいぼくひ)と呼び、煎じて健胃、整腸、強壮に用いました。この木の表面には鋭い棘が密生しているので病魔が恐れて近づかないよう、戸口や窓口、分かれ道などに立てたといいます。

トドマツ (アイヌ語名：フフ/ヤユフ/トトロフ)

アカトドマツともいわれる常緑樹で、松脂をあかぎれに塗るなどして薬用とし、果実は食用としました。樹皮は家屋や猟に出た際につくられる仮小屋などの屋根や壁を葺く材として使われました。また、松脂は接着剤としても使われました。悪い夢を見た時など、この枝で手束をつくり、魔払いをしたといいます。エゾマツの枝が垂れ下がっているのに対し、トドマツは手を広げて万歳でもしているかのように上向きに枝が伸びるのが特徴です。



ナナカマド (アイヌ語名：キキンニ/イナウニ)



バラ科の落葉樹で、眼病の際にこの木を削って水に浸し、患部を洗いました。風邪で熱が出た際や二日酔いにはこの皮や枝を粥に入れ香り付けをしたり、風邪が流行る際には枝を戸口や窓口に刺し、病魔除けとしました。木の搔き綿を温湿布の当て布の代わりにしたり、皮や枝を煎じてお茶としたり、食器や山杖、カンジキなどの材としても利用されました。エゾノウワミズザクラも《キキンニ》と呼び、ナナカマドと同様に利用しました。

ノリウツギ (アイヌ語名：ラスパニ/フレニ/キシリニ)

サビタとも呼ばれるユキノシタ科の落葉樹で、できものができて腫れた際に内皮を削り、袋などに入れてお湯を掛けて湿布薬として利用しました。膀胱炎や便秘、肝臓、喉などの病気に枝を煎じて服用したほか、樹皮を煎じて疥癬の患部の洗浄に用いました。この木の皮をお湯の中に入れると粘り気が出ることからシャンプーと同様に洗髪剤としても用いたといます。銚の柄やキセルの材として使われるほか、火箸や櫛せんなどの炉辺の道具、仕掛け弓の矢柄や花矢の材としても用いました。



ハマナス (アイヌ語名：マウニ/マウニ/オタロフニ (木) /オタロホニ/マウ (実))



バラ科の落葉樹で、産後に果実とエゾノリュウキンカの根を一緒に煎じて服用し、根を煎じて腎臓病や浮腫(むく)みなどに用いました。食用としては果実を生食するほか、茹でて魚油をつけて食べたり、クロユリの鱗茎とあわせて餅のようにして、アザラシなどの油をつけて食べました。木の削り綿を煎じてお茶としても飲まれました。イケマの根やギョウジャニンニクの葉とこのハマナスの枝と《イナウ》(木幣)を添えて戸口に立て、悪疫流行の際には病魔除けとしました。和人はつばみを玫瑰花(まいかいか)といい、胃痛や月経痛、リュウマチ、打撲傷などに用います。果実はジャムや果実酒にします。

ハルニレ (アイヌ語名：チキサニ/カラニ)

アカダモとも呼ばれるニレ科の落葉樹で、オヒョウと同様に内皮から繊維をとり《アットゥシ》(樹皮衣)の材料としましたが、繊維はオヒョウに比べ弱く、赤っぽい色をしています。繊維が柔らかいことから靴の中に履く《ケロルンペ》(靴下)の材料や、赤や黒に染めるなどして莫産の文様を編み込むのに用いました。ハルニレは燃えやすいことから乾燥したものを発火器として、また、根を火口として利用しました。洗髪の際にもこの内皮を用いたといいます。



ホオノキ (アイヌ語名：プシニ/イカヨフニ)



モクレン科の落葉樹で、果実を煎じて腹痛の薬として服用し、温湿布としても用いました。また、樹皮を骨の節々が痛いときに煎じて湿布薬とし、果実は煮立ててお茶として飲用しました。ホオノキで作った削り掛けに赤い布を巻き首飾りを作り身に着けることで、病魔除けとしたほか、刀の鞘や矢筒の材としても広く用いられました。

参考文献

アイヌ民族博物館編『アイヌと自然シリーズ2 アイヌと植物食用編』(1989)

アイヌ民族博物館編『アイヌと自然シリーズ3 アイヌと植物樹木編』(1993)

アイヌ民族博物館編『アイヌと自然シリーズ4 アイヌと植物薬用編』(2004)

アイヌ民族博物館、北海道立衛生研究所、白老町編『しらおいで見られるアイヌ民族の有用植物一薬用・食用編一』(1996)

知里真志保著『分類アイヌ語辞典第一巻植物編』(日本常民文化研究所 1953)

山岸喬著『北海道薬用図鑑野生編』(北海道新聞社 1992)

佐藤孝夫著『北海道樹木図鑑』(亜細亜社 2000)

海沢俊著『新北海道の花』(北海道大学出版社 2007)

ヒグマ (アイヌ語名: キムンカムイ/イソ)

《キムンカムイ》(山の神)は、《カムイ》(神)と省略的に言うことも多い。たくさんいる《カムイ》「神」の中で《カムイ》と言うだけでヒグマを指し、それだけで通じるのは、《ヤウンモシリ》(北海道)のアイヌ民族にとってヒグマがいかに身近で大切な存在であった



かがうかがえます。方言の違いやクマの年齢や性質などの特徴で、いくつもの呼び名があり、例えば次のような言い方があります。

《エカシ》 (お爺さん) 《キムンエカシ》 (山の・お爺さん)

《ヌプリコロカムイ》(山・を支配する・神) 《エペレ》 (一歳の小熊)

《シケ・カムイ》(荷物をしょった・神/太った・熊)

《シケ・カムイ》についてアイヌ民族は熊の神は肉と毛皮、熊ノ胃(胆のう)を土産に地上の国へ遊びに来た仮の姿であると考え、太った熊をこのように呼びました。

《エペンカウシ》(前の方に・つえを・ついている) 前足が長い神

《オペンカウシ》(後ろの方に・つえを・ついている) 後ろ足が長い神

「前足が長い熊を射損じたら坂の上に向かって逃げる、逆に後ろ足の長い熊だったら坂の下に向かって逃げる」とアイヌ民族には伝えられています。現代人がヒグマに遭ってしまった時の対処法は他にありますので、そちらを参考にしてください。(レンジャー、熊の研究家、北海道庁など)

《ウェンカムイ》(悪い・神)

初雪が降っても冬眠しない熊、人を襲った熊、銀毛の多い熊(気性が荒い)などを指して言います。

《イオマンテ》、《イヨマンテ》と呼ばれる儀式が有名ですが、特に熊の《イオマンテ》は盛大に執り行われました。(よく聞かれるアイヌ民族に関する単語 107 頁参照)

記載した内容以外にもヒグマについては多くの話があります。専門書などをご覧ください。

エゾオオカミ (アイヌ語名：ホロケウ／ホロケウ／オンルプシカムイ)

明治時代、本州方面に送る缶詰生産と毛皮をとることを目的にエゾシカが乱獲され、自然界での食糧不足がオオカミの減少をもたらしました。その結果、飢えたオオカミによって「開拓」農民の家畜が襲われるという事件が多く起きました。人間の一方的な考えから、開拓使（現在の北海道庁）によって害獣として駆除されたことが追い打ちをかけ、エゾオオカミは1896年頃に絶滅しました。

体長120～124cm、尾は27～40cmとシェパードほどの大きさで、エゾオオカミの方がニホンオオカミよりはるかに大型です。

アイヌ民族は鹿をとる神、猟をする神として、狼を崇めて共存共栄していました。

狼は自分たちで鹿をとって食べていても、人間がたまたま通りかかり咳払いをすると、その肉を譲るといいます。逆に、熊は自分がとった獲物を人間に横取りされると、村まで取り返しに来るほど執着心が強く、恐ろしいものとしています。ですから、アイヌ民族は決して狼に矢を向けてはならないと戒められています。また、熊に襲われた人間を狼が熊から救うなどの話が伝承されるなど、狼とアイヌ民族は良き隣人のようでありました。

エゾシカ (アイヌ語名: ユク)

エゾシカはニホンジカの一亜種で最も体格が大きく（頭胴長: オス 180cm、メス 150cm）、夏の体毛は茶色に白い斑点、冬は全身が黒褐色になります。オスには角がはえ、年とともに枝分かれして大きくなります。5～6月に落角し、すぐに新しい角が成長を始めます。生息場所はエサになる草地のある森林地帯を主としています。



明治時代には大雪の影響と乱獲、《ヤウンモシリ》(北海道)の「開拓」による生息域の破壊などが重なり、大きく個体数を減らしてしまいます。その後、1890(明治23)～1900(明治33)年、1920(大正9)～1956(昭和31)年の禁猟期間を経て、徐々に生息数が回復し、今日に至っています。

エゾシカは石狩川筋のアイヌ民族にとって、食料ではあったものの《カムイ》ではありませんでした。

かつては《ヤウンモシリ》(北海道)のアイヌ民族の重要な食料源であり、毛皮・角なども生活用具の素材や交易品として幅広く活用されていました。《ユクウル》(鹿皮の衣)、《クヨイ》(鹿の膀胱で作った水袋)、《イパナケニ》(鹿呼び笛)、《マカニッ》(矢骨)など、多くの民具が今日に伝えられています。

キツネ (アイヌ語名：チロンヌフ/スマリ/シトゥンペ/スマリ)

キツネを指すアイヌ語はいくつかあり、《チロンヌフ》のほかに《ケマコシネカムイ》とも呼ばれます。

《チロンヌフ》を語源分解すると、《チ》(我ら)、《ロンヌ》(殺す)、《フ》(もの)、となります。一方、《ケマコシネカムイ》は、《ケマ》(脚)、《コシネ》(軽い)、《カムイ》(神)、となります。《チロンヌフ》の語源から考えると、獲物の



の一つと言うことができます。《ケマコシネカムイ》の語源からは、速く走ることができる動物であることがわかります。

伝承－「キツネのチャランケ (談判)」

【ストーリー】 支笏湖のほとりに棲んでいたキツネが、《ウサクマイ》村の《アイヌ》(人間)の青年が捕ったたくさんのシャケの中から1匹を失敬したところ、その青年が悪口を浴びせ、《ポクナモシリ》(裏側の国土)へ追放されそうになります。そこでキツネは、その《ウサクマイ》村へ行き「キツネも神から授かったシャケを食う権利がある」と《チャランケ》(談判)をして追放を免れ、《アイヌ》(人間)がキツネに謝罪し、《アイヌ》(人間)はそのキツネに守られながら暮らしました、というお話です。

出典：萱野茂著『小学生日本の民話－15 キツネのチャランケ』(小峰書店 1975)

タヌキ (アイヌ語名: モユク)

タヌキを指すアイヌ語は《モユク》《モ》(ちいさな)《ユク》(えもの)。タヌキは脂身の多い動物であるため、食料として珍重されました。沙流川流域では「タヌキ送り」の風習があります。1964～65年にNHKの記録映画『ユーカラの世界』が撮影された時に、二風谷ではタヌキが飼育されていました。映画に記録されたか否かは不明ですが、「タヌキ送り」がこの時代までは伝承されていました。



伝承-「ムジナとクマ」

【ストーリー】年寄りグマと若い娘のムジナ(◆用語解説下記参照)と一緒に暮らしていました。年寄りグマは、人間世界に行って若返ろうと思い、村長の息子たちが狩りに来ることを知り、巣穴の前に新しい土を出しておくようムジナに命令しました。クマとムジナは、弓で仕留められ、村へ運ばれ盛大な歓迎を受けました。自分たちの肉がご馳走としてお椀に盛られ、《ユカラ》(英雄叙事詩)などを聞かせてもらいました。ムジナはクマに「自分の肉を食うと神の世界へ戻ることができないので、絶対に口にはしてはいけない」と命じられていたのに、我慢できずムジナは自分の肉を食べてしまいます。そのためムジナは、罰により神の世界へは戻ることができず、人間世界で戸口を守る神、そしてお産を手助けする神として残ることになった、というお話です。

出典：萱野茂著『炎の馬』(すずさわ書店 1977)

◆用語解説【ムジナ】

ムジナとタヌキは同じであるか否かの議論はしません。この物語では《モユク》と表現されているのでタヌキであると思われます。表題のみ「ムジナ」となっていますが、タヌキと解して良いでしょう。

カワウソ (アイヌ語名: エサマン/エサマン)

カワウソを指すアイヌ語は《エサマン》。イタチに似た水辺に棲む獣で、扁平な尾を持つのが特徴です。今から50年くらい前までは沙流川にも棲んでいました。

『知里真志保著作集 別巻1』には次のように記されています。

〔この語の語源は、たぶん e-saman-ki「それで・サマンを・する」であったと思われるが、saman の意味が忘れられるに従って、民間語源はそれを esaman-ki「エサマンを・する」と分析し、このト占にはカワウソの頭骨が多く用いられたので、esaman がカワウソの意味になったのではなかろうか。〕



伝承—「カワウソが人間に化けた話」

【ストーリー】お爺さんに育てられた少年が、自分の許婚いいなずけのもとを訪ねると、カワウソが自分そっくりに化けて先に来ていました。そこで、そのカワウソを贖者と見破って退治し、カワウソを見守るべき海の神がしっかりしていないからだ、と叱りつけました。海の神は「本来、人間は人間同士、神は神同士が結婚しなければならぬが、若い者の恋心に免じ許して欲しい」と言いました。

そのお詫びに毎年1頭のクジラを贈ろう、と約束しました。実は、育てのお爺さんは家の守護神でありました。その後、少年は許婚いいなずけと結婚し、現在は多くの孫に囲まれ幸せに暮らしています、というお話です。

出典：萱野茂著『炎の馬』（すずさわ書店 1977）

イヌ (アイヌ語名：セタ/セタ/シタ/レイェフ)

北海道犬は、《ヤウンモシリ》(北海道)原産の日本犬種(古くから日本に住んでいる犬の総称)です。

1869(明治2)年に、イギリスの動物学者T・W・ブラキストンによりアイヌ犬と命名されました。しかし、アイヌ犬という呼び方を快く思わないアイヌ民族が多かったことから、1937(昭和12)年には国の天然記念物に指定された際には、正式名称が「北海道犬」と定められました。

三角形の小さな「立ち耳」をもつ中型犬で、目尻が吊り上がった三角形の小さな目を特徴とします。性格は飼い主に忠実で、勇敢、大胆、怖いもの知らずで、我慢強く、粗食に耐え、寒さに強いとされています。

伝統的なアイヌ社会において、犬の飼育は広く一般に行われており、狩猟・漁猟を行うときの心強いパートナーでした。アイヌ民族の民具としては、《セタウル》(犬皮の衣)が今日に伝えられています。



アザラシ (アイヌ語名：トッカリ/トゥカラ/アトゥイクンカムイ/トゥコロ)



《トッカリ》は、アザラシの総称です。アザラシの種類、年齢、地域や状況によって呼び名が異なります。

《ヤンケモシリ》(樺太)東海岸では、アザラシの総称は《カムイ》(神)ですが、西海岸では《カムイ》(神)はトドを指し、《ヤウンモシリ》(北海道)、《ルトム》(千島列島)地方では熊を指します。

ラッコ (アイヌ語名: アトゥイエサマン/ラッコ)

有名なラッコですが、アイヌ語由来の言葉であることはあまり知られてません。

《アトゥイ》(海)《エサマン》(かわうそ)とも呼ばれます。

北方四島に生息するラッコの毛皮は世界一といわれるほど上質で、一時乱獲によって絶滅したとみられていましたが、現在は保護されているため、その数を回復していることが研究者から報告されています。体長は150センチにもなり、お腹の上に貝などのえさをのせ石で割っている様子はとても愛らしく、水族館でも人気の的です。



シャチ (アイヌ語名: レブンカムイ/レブンカムイ/アトゥイコロカムイ/チオハヤク)



シャチを指すアイヌ語は《レブンカムイ》で、それを語源分解すると、《レブ》(沖)、《ウン》(いる)、《カムイ》(神)、となります。なぜ「沖の神様」と名付けられたかということ、シャチがクジラを追い回し、浜辺にクジラを寄り上げて、クジラ肉という食料を《アイヌ》(人間)に与えてくれる、と考えていることによります。

伝承—「襟裳岬のシャチの神」

【ストーリー】母親が自分の娘のお婿さんは誰にしようか思案し、クマ神は大食いだし、オオカミ神は足が速いし、龍神は音が大き過ぎるし、《アイヌラックル》(オキクルミの別称。半分神で半分人間)は火を使うので熱いだろう。シャチ神が最適だと言いました。すると、シャチに自分の娘がさらわれてしまいました。泣き暮らしていた母親は、夢で娘の無事を知らされ、シャチ神は「毎年、クジラを襟裳岬に寄こす」と約束しました。それから、襟裳岬にはクジラが寄りあがるようになった、というお話です。

出典: 萱野茂著『萱野茂のアイヌ神話集成第2巻』カムイユカラ編II (ビクターエンタテイメント株式会社 1998)

クジラ (アイヌ語名：フンペ/ウンペ/リカ)

大型のクジラは昔からたくさん肉を食料として与えてくれました。かつてはクジラ漁といっても船で出かけていって鮫などでおこなう漁よりも、シャチなどに追われ海岸に打ち上げられた寄りクジラの利用がほとんどでした。そういったことから、古くから伝わる舞踊の中に《フンペリムセ》(鯨の踊り)が各地に伝わっています。工芸品にはクジラの髭が用いられ、透かし文様などの彫刻を施したものもあります。



《ヤウンモシリ》(北海道)の海岸各地にはクジラのアイヌ語名《フンペ》のつく地名が多くあります。例えば、広尾町のフンペの滝、室蘭市のフンペシュマ、登別市にフンペサバと呼ばれる丘などがあります。

《フンペサバ》(鯨の頭)にまつわる伝説(登別市)

昔、オキナ(マッコウクジラ)という巨鯨がいて、海の魚ばかりか漁に出た人間をも飲み込んでしまうので、神々が心配して、六日六晩かかって刀をつくり、それをカワウソの神様に持たせて退治に向かわせました。ところが、カワウソは世界の果てまで行ってオキナと出会いましたが、大声をあげてどなり散らすだけで、一向に刀を抜いて切ろうとしません。その争いの声がものすごいので、どこへ行っても神々は逃げてしまい、助太刀しようとしませんでした。それを登別の神だけは逃げようとせず、「なぜ刀を抜いて切ろうとしないのだ」とカワウソに注意をしたので、カワウソは初めて刀をもっていることに気づき、刀を抜くなりオキナを真二つに切って、頭の部分をお礼として登別の神に置いて行きました。それが現在のフンペサバと呼ばれる丘になったのだといえます。

(出典：更科源蔵・更科光『コタン生物記II 野獣、海獣、魚族篇』(法政大学出版社 1976))

*カワウソはアイヌ民族に伝わるお話の中では、物忘れのはげしい神様として登場することが多いです。

エゾリス (アイヌ語名：トウスニケ/トウスニンケ/ロホセ)

エゾリスを指すアイヌ語は《トウスニケ》。北海道方言ではエゾリスをキネズミと呼んでいます。

『知里真志保著作集 別巻Ⅰ』には [(1) tusuninke [〈tusu (巫術) ninke (消す)；‘巫術を使って姿を消すもの’の義か] ((ホロベツ；シラオイ；チトセ；チカブミ；テシオ))] とされています。萱野茂の言い伝えによると、「エゾリスに小便をかけられると運が悪くなる」とあります。また、山を歩いている時にエゾリスに見つめられると、髪の毛が一本立ちになり殺気を感じる。そのような場合は、ゆっくりと周りを見回し、こちらを見ているもの(動物)を確認しなければならない、とされています。



シマリス (アイヌ語名：ルウォフ/セトウンロホ)



シマリスを指すアイヌ語は《ルウォフ》。語源分解すると、《ル》(道)、《オ》(入る)、《フ》(もの)、となります。体に対して縦方向に長い縞模様がありますが、その模様を指して「道が入っているもの」と名付けています。

『知里真志保著作集 別巻Ⅰ』では [(1) kasiikirkus [〈kasi-ikir-kus (その上に・線を・通っている)；‘その背面に縞が通っているもの’] ((ホロベツ；レブン))] と解説されています。

トナカイ (アイヌ語名: トゥナハカイ)

成獣を《トゥナハカイ》といます。

シカ科の哺乳類。北極地方のツンドラ地帯に住み、雌雄ともに角を持ち、ひづめが大きいです。

古くから家畜化されています。



モモンガ (アイヌ語名: アッ/ハッ/アハ)



モモンガ亜科に属する小型哺乳類。滑空によって飛翔するリスの仲間です。

トド (アイヌ語名: エタッペ/エタシペ/カムイ)

トドを指すアイヌ語は《エタッペ》。『知里真志保著作集 別巻Ⅰ』には、[§ 280. トド; キタアシカ E. 'sea-lion' *Eumetopias jubata* (SCHREBER) (1) etaspe a) トドの総称 ((H.)); b) 成体の雄を言う ((S.)) 注: -チシマでもこの語は使われたらしい] と解説されています。



伝承-「ウサギとトド」

【ストーリー】 海辺の波打ち際で昼寝をしているところへウサギが話しかけて、トドの背中に乗せてもらい海へ散歩に出かけます。ところが、海の神の妹が病気になり、ウサギの生肝（なまぎも）を食べると治るということで、トドはウサギを騙して連れてきたのです。すると、ウサギは「薬になる肝は木の枝にかけて干してあるので、一度岸へ返してください」と言いました。騙されたウサギは、機転をきかせて逆にトドを騙し、命拾いした、というお話です。

参考文献：萱野茂著『小学生日本の民話- 15 キツネのチャランケ』（小峰書店 1975）

ゼニガタアザラシ (アイヌ語名：トゥカラ)

日本に定住する唯一のアザラシで、《ヤウンモシリ》(北海道) 東部の襟裳岬や大黒島(厚岸町)・歯舞諸島などに生息しています。

体長・体重はメスの成獣で120～170cm・50～150kg、オスの成獣で150～200cm・70～170kgほどになります。黒地に白い穴あき銭のような斑紋を持ち、体の色には暗色型と明色型がありますが、日本に生息している個体はほとんどが暗色型です。



新生児は母の胎内で白い産毛が抜けてしまうので、大人と同じ銭形模様で生まれてきます。ゼニガタアザラシは岩場で出産するので、大人と同じ銭形模様であるほうが天敵に狙われにくいという利点があるようです。

日本に生息する亜種は嫌氷性で、海氷、流水の来ない岩場で定住生活をします。《ヤウンモシリ》(北海道)の太平洋側のいくつかの岩礁に定住している個体群もあります。

江戸時代に描かれたアイヌ絵(和人によって描かれたアイヌ民族の姿)を見ると、銭形模様のある獣皮衣がたびたび現れます。生息域近くに住む人々の食料源であると同時に、生活用具の素材でもあったのです。

サケ (アイヌ語名：シベ/シベ/カムイチュフ/チュフ/チュフチュエ/シチュフ)



《シベ》(真・魚)、本当の魚と呼ばれます。《カムイチュフ》(神・魚)をサケの総称として呼ぶ地方もありますが、特別なサケを指すことがあります。地方によっては、最初に捕れたサケを指します。アイヌ民族の重要な食糧の1つです。(各地の伝説 キツネのチャランケ 76 頁参照)

エゾシマフクロウ

(アイヌ語名：コタンコロカムイ/コタンコホチカハ/モシリコロカムイ/カムイチカフ/カムイエカシ)

アイヌ語で《コタンコロカムイ》(村を見守る神)といます。《コタン》(集落)、《コロ》(持つ・～を掌握する)、《カムイ》(神)という意味です。アイヌ民族の中では非常に尊い存在として大切にされてきました。

昔から次のような伝説が伝わっています。天に住まう《イカツカラカムイ》(造形の神)が美しい大地を作り、人間を作り、木や動物を作られました。そのように美しいものは《ウェンカムイ》(悪い神)も欲しがるので、見張り役として天の国・神の国からフクロウ神が降ろされました。



それ以来、フクロウ神を《モシリコロカムイ》と呼ぶようになりました。また、夜間の集落を警護し、自然災害の恐れがある時や熊が近づいた時などは人間に鳴き声で知らせたり、村に危険が迫ったりしないよう魔を追い払ったりするので、《コタンコロカムイ》(村を見守る神)とも呼びます。

特に道東ではフクロウ神を熊神より位が高いとして、その《イオマンテ》が一番盛大に執り行われました。

エゾフクロウ (アイヌ語名:クンネレックカムイ/イソサンケカムイ/フンセイ)

この鳥は鳴き声で熊のいる場所を教えてくれる神で、「ペウレフ! ペウレフ チコイキフ! (小熊だ! 小熊だ 獲物だ!)」と鳴きます。《チコイキフ》とは(我らが打つもの)という意味で、すなわち「けもの・獲物」を指します。エゾフクロウを「獲物を授ける神」と呼びます。

また、《イソ》とも言います。エゾフクロウの鳴き声の方へ行くと必ず獲物がとれるといい、このことから《イソサンケカムイ》(獲物を授ける神)と呼びます。



タンチョウ (アイヌ語名:サロルンカムイ/サロルンチリ/サロルンチカフ/ヌッカ/サルルン/ユマキ)



アイヌ語で《サロルンカムイ》(湿原に住む神)と言います。タンチョウの鳴き声によってクマの居場所を知り感謝したという伝承(屈斜路)や、人を殺したクマが人びとに追われてタンチョウの巣の近くに逃げ込みタンチョウがこのクマを退治したという伝承(芽室町)があります。

また、タンチョウの動きを真似た踊りは各地に伝承されており、とても優美な動きで知られます。

現在タンチョウの多くは釧路湿原に生息し、国の特別天然記念物に指定されています。

羽を広げると2m以上にもなる大きな鳥で、第二次世界大戦後、わずかな個体を確認され、手厚い保護と地元民の餌付けが功を奏して、今では1,000羽以上が確認されるまで回復しました。

カッコウ (アイヌ語名：カッコク/パッコ/ボホコ/ヘモイチカハ)

カッコウを指すアイヌ語は《カッコク》(鳴き声)。カッコウは自分で巣を作らず、ほかの鳥の巣へ托卵する習性を持つため、カッコウの巣を見つけることは難しいです。アイヌ民族は、カッコウの鳴き声は大変美しいと考えています。

アイヌ文化では、カッコウが鳴き始めたら畑に何を植えても霜にあたらないので大丈夫といえます。



伝承ー「カッコウ鳥が私を助けてくれた」

【ストーリー】貧乏人の娘が山へ薪(まき)を拾いに行ったとき、カッコウの白銀の卵を3個見つけて家へ持ち帰りました。兄はそれを宝箱にしまい、大切にしていました。すると、お金持ちの村長(むらおさ)が、息子の嫁にあなたの娘さんを欲しいと、訪ねて来ました。両親や兄弟は反対し、本人も嫁に行くことを嫌がりました。村長の奥さんが着物や装飾品を持って来て、さらに村長の息子も狩りの手伝いに来るようになりました。そこで貧乏人の娘は村長の息子の所へ嫁に行くことになりました。

ある時、嫁に行った娘が夢を見ました。「私はカッコウの神で、お前と一緒にの日に生まれたのだ。だから、お前をずっと守ってきた。今度は、お前たちがカッコウ神へお祈りを捧げるならば、ずっと守ってあげましょう」と。それ以来、娘たちは幸せに過ごしました、というお話です。

出典：萱野茂著『ウエベケレ集大成』新訂 復刻(財団法人日本伝統文化振興財団 2005)

スズメ (アイヌ語名：アマメチカッポ/エチキキ/ハチビビ/ウサツ)

スズメを指すアイヌ語は《アマメチカッポ》(穀物・食う・小鳥)。スズメはアイヌ民族にとって身近な小鳥です。



伝承—出典は不明ですが、萱野茂の言い伝えに次のような話があります。「昔、神の国から、スズメとカケスに訃報が届きました。スズメはすぐに神の国に戻りましたが、カケスは見繕いをしていて、遅れて神の国へ着きました。スズメは褒められ、カケスは叱られました。その結果、『これからの人間世界で、スズメは穀物を食べてもよいが、カケスは虫以外食ってはならん』とされた」という話です。

カケス (アイヌ語名：エヤミ/パラケウ/ハルボ)



カケスを指すアイヌ語は《エヤミ》、または《パラケウ》。

『知里真志保著作集 別巻Ⅰ』には、[§ 300. かけす；ミヤマカケス *Garrulus glandarius pallidifrons* KURODA (1) eyami (エヤミ) ((ホロボツ)) ミヤマカケス]と解説されている。

*伝承については、「スズメ」の項のお話をご覧ください。

カラス (アイヌ語名：シバシクル/カララク/エトウアネ/エトウツカ (ハシフト))

道南では、ハシフトガラスを《シバシクル》(糞・カラス)、また(大、真の・カラス)と呼びます。

ハシボソガラスを《カララク》(鳴き声)と呼びます。

カラスは好まれない鳥として思われていますが、ハシボソガラスは、鳴き声で吉凶を知らせる神様として扱われました。また、ハシフトガラスは糞ガラスと呼ばれる一方で、狩猟に出かけた時など、危険を知らせたり、クマなど獲物の居場所を教える(カラスが集団で騒ぐ)カラスでもあるといわれています。



オジロワシ (アイヌ語名：シチカフ/オンネウ)



ワシタカ科、オジロワシ属。

国の天然記念物に指定されており、春にふ化し、巣立ちまで約70～90日かかります。体長約80cm。翼を広げると2mにも達する大型のワシです。淡褐色の体に、白く短い尾羽、黄色いくちばしを持ちます。

冬に《ヤウンモシリ》(北海道)を中心に渡来するのは数百羽程度です。

アイヌ文化ではワシの仲間とはとても偉い神様です。

ワシをとったときは丁重に儀式を行い、魂を神の国に送り返したといえます。

エトピリカ (アイヌ語名: エトゥピリカ)

エトピリカという鳥名はアイヌ語がもとになっており、《エトゥ》(鼻・くちばし)《ピリカ》(美しい)という意味です。

体長 40cm・体重 750 g ほどの大きさで、くちばしは橙色で縦に平たく、縦に数本の溝があります。足は橙色で、顔と足以外の全身は黒い羽毛に覆われます。冬羽は顔が灰色で飾り羽がなく、

くちばしの根もとも黒っぽいのですが、夏羽では顔が白くなり、目の後ろに黄色の飾り羽が垂れ下がり、くちばしの根もとが黄褐色の独特の風貌になります。

世界的にみると決して少ない鳥ではないものの、日本は分布域の西端にあたり、生息数も多くありません。繁殖個体群も《ヤウンモシリ》(北海道)東部の厚岸町大黒島、浜中町霧多布小島、根室市ユルリ島、モユルリ島などで十数のつがい繁殖するのみで、日本に限っては地域絶滅の危険が大きいとされています。

伝統的なアイヌ社会では、鳥羽衣の素材として用いられたほか、食用にもされていたことが記録されています。



クマゲラ (アイヌ語名: チフタチカフ/チフタチカフカムイ/ニトクトキ/ニートホトキチカハ)



アイヌ民族の伝説に、ある年ひどい洪水にみまわれた村があり、みんな水に流されたものの、クマゲラが掘った巣穴のある丸太の穴に入れた子供だけが助かった、という話が伝わりました。以来、それをアイヌ民族が真似して丸木舟を作るようになったといえます。それからクマゲラを《チフ》(舟)《タ》(ほる)《チカフ》(鳥)「舟を彫る鳥」「舟を彫る神」と呼ぶようになりました。

オオワシ (アイヌ語名：カパッチリ/サマツカ)

ワシの仲間は、アイヌ文化ではとてもえらい神様です。大きさは双方とも翼を広げると2mにもなります。アイヌ語の名前はオオワシ・オジロワシとそれぞれ採録されていますが、聞き取りデータでは詳しい種名までは出て来ません。ワシの仲間はこれ以外にもまれにみられるイヌワシがいます。このようなワシをとったときには丁寧に儀式を行い、魂を神の国に送り返しました。人に幸せをもたらすえらい神様として登場する昔話があります。



参考文献：アイヌ民族博物館『アイヌと自然 デジタル図鑑』

シギ ヤマシギ (アイヌ語名：トゥレフタチリ) オオジシギ (アイヌ語名：チピヤク)



オオジシギは夏鳥で、春になるとオーストラリア方面から渡ってきます。

春先、《チピヤク》の急降下する情景をよく目にすることができれば、その年の食糧（穀物を指す）が豊作になるともいわれました。他に和人が舟に交易品を積んでコタンにやってくることを知らせる鳥で、鳴き声を聞いてただちに交易の用意をすれば、そのものは裕福になれるという言い伝えなどがあります。

参考文献：(財) アイヌ白老民族文化伝承保存財団『アイヌと野鳥1』、昭和61年12月1日

カワセミ (アイヌ語名:ソカイ/ソカイクムイ)

カワセミは、ブッポウソウ目カワセミ科に分類される鳥。水辺に生息し、鮮やかな水色の体色と長くくちばしが特徴です。

大きさはスズメほどで、くちばしが長く、頭が大きく、首・尾・足は短いです。オスはくちばしは黒く、メスは下のくちばしが赤いので区別ができます。光の加減で青く見える構造色で「渓流の宝石」とも呼ばれます。

日本で《ヤウンモシリ》(北海道)においては夏鳥ですが、ほかの地域では1年中見ることができます。



シシャモ (アイヌ語名:スサム)



アイヌ語の《スス・ハム》(ヤナギの葉)が訛ってシシャモという魚名になったと言われています。

シシャモの産地で知られる釧路地方には、次のような物語が伝えられています。

ある村が飢饉に襲われて、山には山菜も木の実も何一つならず、獣はどこに消えたのかキツネ1匹、鳥1羽姿を現さない年がありました。

途方に暮れた、ある美しい娘が村近くの川に行き、神に祈りました。「どうか神様、私達人間はみんな飢えて死にそうなのです。この窮状を見て、なんとか助けてください」と。すると「ヤナギの葉を採取して川に流すと良い」との御告げがあり、村中の者がその言葉どおりにヤナギの葉を流したところ、たちまち魚に姿を変えて川いっぱいに泳ぎ出しました。それを見た娘は大急ぎで村人を呼んで、その魚を取った村人は助かったという話です。それでその魚を《スス・ハム》と呼ぶようになったのだそうです。《スス・ハム》と言ったアイヌ語を、和人はシシャモと呼ぶようになりました。

イトウ (アイヌ語名：チライ/チライ)

「春はイトウ、秋は鮭」というほど、アイヌ民族にとってイトウは重要な食料であり、皮は服にしたり履きものにするなど大切なものでした。2mを超える巨体のものも捕獲された記録が残っています。気性は荒く、釣り人にとって幻の魚といわれています。カエルや水鳥のひなや泳いでいる蛇を食べるなど、かなりの悪食としても有名です。



かつてのアイヌ民族は燻製、日干しにしてから食べました。虫がいるので生では食べませんでした。最近、阿寒湖で養殖法が進歩して刺身でも美味しく安全に食べられるようになり、今では本州方面の料亭でも人気の食材です。

カラフトマス (アイヌ語名：エモイ/エモイ/ヘモイ/ヘモイ)



サケ科、サケ属の回遊魚。背面や尾びれ、脂びれに黒い斑点があるのが特徴です。降海後、2～3年で成熟して産卵します。産卵は比較的海に近いところで行われ、産卵後に寿命を終えます。北太平洋、ベーリング海、オホーツク海、日本海、岩手県、《ヤウンモシリ》(北海道)に分布しています。

サクラマス (アイヌ語名：サキペ/イチャニウ)

サケ目サケ科に属する回遊魚で、非常に美味しく食用にします。また、溪流釣りの対象魚として人気が高い魚です。太平洋北西部を中心に分布します。

成長とともに海に下りて回遊し、産卵時に川を遡上する降海型の種類であると考えられていますが、一生を淡水で過ごす陸封型の個体もあります。一般に降海型は大きく成長しますが、陸封型は比較的小型のままの個体が多いです。



サケとマスの産卵場をホリ場と呼びますが、アイヌ語では《イチャン》と言います。根室標津に「伊茶仁 (いちゃに)」という地名がありますが、これは産卵場のある川という意味になります。このほか「一巴内 (いちゃんない)」は産卵場のある川という意味になります。

全道的に多い熊牛・熊石などの地名は、熊や牛を使っていますが、動物のくま・うしとは何の関係もなく、マスが豊漁だった所に名付けたものです。《クマ》とは魚を干す竿、《ウシ》は「〜があるところ」という意味です。

ヒメマス (アイヌ語名：カパッチェフ/カバラ・チェフ)



ベニマスの陸封型のを指し、阿寒湖とチミケップ湖が原産です。《ヤウンモシリ》(北海道)の名産であり、阿寒湖温泉では一年を通して食べることのできる、人気の魚です。

提供：サケのふるさと千歳水族館

カワシンジュガイ (アイヌ語名: ピバ/イチャセイ/トヤンペ)

淡水(川)に棲む二枚貝で、ヨーロッパでは古くからこの種の貝から真珠をとっていたため、その名があります。食用としては、煮て細かく刻んで酢味噌和えにします。また、乾燥させて保存し、冬に搗(つ)いて汁物のダシとしました。殻は、大きなものは保存し、一片を用いて穂ちぎり(収穫用具)として用いました。

〈補足〉明治初期、(戸籍)が整備された頃、アイヌ民族にも和人と同様に姓が付けられました。

当時、《ヤウンモシリ》(北海道)内では各地でアイヌ民族に対する戸籍の整理が行われ、沙流川流域の(現)平取町二風谷では、《ピパウシナイ》(カラス貝が多い沢)という沢の周辺に集落を持っていたアイヌ民族に「貝沢」という姓を付けました。

カジキ (アイヌ語名: シリカフ/ユベ/ニッポ)



カジキのことをアイヌ語で《シリカフ》といいます。スズキ目・メカジキ科及びマカジキ科に属する魚の総称です。大型肉食魚で体長4 m以上のものも多く、メカジキやクロカジキ、マカジキなどどれも剣状に鋭く長く伸びた上顎が特徴的です。とてもどう猛で、時にはクジラを攻撃したり、船板を貫くこともあるそうです。温帯や亜熱帯の海に分布し、夏の一時期、《ヤウン

モシリ》(北海道)の近海にも姿を現します。

かつて、アイヌ民族は夏の海に船を漕ぎだし、《キテ》と呼ばれる投げ鉾一本でカジキ漁に挑みました。肉は汁ものなどにして食べ、上顎の固い部分は杖や鉾などの材料として用いました。

生態や肉質がマグロに似ていることからカジキマグロとも呼ばれることがありますが、マグロとは異なる分類群です。

〈シリカブ豆知識〉

- Q. ちなみに《シリカブ》(カジキ)には、歯がありません。どうやって餌を食べるのでしょうか？長い上顎は何をするにも邪魔なような気がしますが…。
- A. 《シリカブ》(カジキ)はカツオやイワシ、イカなどを餌として食べるのですが、あの一見、邪魔になりそうな長い上顎を左右に振って魚をなぎ倒し、飲み込むのだそうです。あの鋭い上顎で叩かれたら魚たちも気を失ってしまうのでしょうかね。

ニホンザリガニ (アイヌ語名：ホロカレイェブ)

ニホンザリガニを指すアイヌ語は《ホロカレイェブ》。《ホロカ》(反対)、《レイェ》(這う)、《ブ》(もの)、と語源分解できます。ニホンザリガニは、うしろに後ずさりするようにして進みます。



伝承—「つながれたざりがに」

「水を汲みに水汲み場へ行くと、そんなに何時もではないけれど、たまあに《ホロカレイェブ》(ざりがに)を細い紐でしばって、水から少し離れた沢辺の木などに、つないであるのを見ることがありました。なんのためにつながれていたのか、当時は知りませんでした。後で聞いた話では、雨降らしのまじないであったということです。それはざりがにの神に無理難題をふっかけ、水へ帰りたければ雨を降らせて、ここまで沢水を増水させろ、ということであったのです。本格的な雨乞いであれば、貂の頭などを用いて大川で雨乞いをするけれど、簡単な雨降らしは、このように小沢で、ざりがにを相手に行ったわけでありました。(原典どおり)」と記されています。

出典：萱野茂著『おれの二風谷』(すずさわ書店 1975)

エゾサンショウウオ (アイヌ語名：オチウチェッポ／チボンラフ)

サンショウウオ科。成体は全身が黒褐色をしていて、山麓の森林に多く棲み、平地や山地でも見られます。

沼・池・湿地などの止水に産卵し、幼生はそれらの止水に棲みます。水陸両生で夜行性であり、肉食性で共食いもします。



カエル (アイヌ語名：テレケフ／オオワツ／テレケイペ／オボンバキ)



エゾアカガエルを主にこのように呼びました。《オオワツ》(鳴き声)ともいいます。これは、カエルの鳴き声をオオアと表現したためです。

ヘビ・アオダイショウ (アイヌ語名:タンネカムイ/ヤヤンカムイ/キナストウクル/オヤウ)

ヘビ類の総称として、『タンネカムイ』と呼ばれます。

伝承—「蛇の話」

山火事などで、ヘビが焼け死んでいる姿を見たとき、その状態がぐるぐると体を丸めた姿ならば、「さすが度胸のいい神、あなたであったから逃げもしないで神本来の姿になったのですね。諸々の神があなたの度胸を褒めたたえることでありましょうよ」と言いながら、軽く礼拝します。反対に、長々と伸びた姿であれば、「おまえが聞いて来たはずのアイヌの国土の山火事なのに、何だその逃げざまは。意気地なしの神め」と言って通るといいます。これには、次のような経緯があるのです。

「昔々、アイヌの国土は美しく住みよいという噂を聞いた蛇は、『ぜひアイヌの国へ行かせてください』と、天の神にお願いしました。すると天の神は、『アイヌの国というところは美しいことばかりではなしに、山火事も多いので、もし山火事が発生したときに、いくじなく逃げ隠れないなら、行ってもよい』と言われました。それを聞いた蛇は少しためらいはしましたが、『万一山火事になったとしても、いくじなく絶対逃げも隠れもいたしません』と神様に約束したので、ようやく下界に降りることが許された」…と。

そういうわけで、山火事るとき蛇の焼け死んだ姿を見たときには、そのように声をかけるのだということです。

出典：萱野茂著『おれの二風谷』（すずさわ書店 1975）



マムシ (アイヌ語名: トッコニ/シアンカムイ)

アイヌ民族にとってマムシは《カムイ》(神) ですが、どのような神なのかあまり伝承がありません。

萱野茂氏伝承の《ウェペケレ》(民話) に次のようなものがあります。

昔、あるコタンに《パコロカムイ》(疱瘡の神) がやってきて、《コタン》(集落) の者が次々と死んでいきました。1人の男が子どもだけでも助けようと、幼いわが子を草むらに置き、祈りを捧げ



ました。それを見ていたマムシのじいさん神が、可哀想に思い、その子を助けることにしたのです。やがて村の者は疱瘡で死に絶えました。マムシのじいさんは、幼子を育てたのですが、何故かいつもその子に言いがかりばかりつけていました。やがて子どもが成長すると、じいさんは全てを打ち明けました。「お前は一人前になり、《チャランケ》(談判) も立派にできるようになった。これから、《パコロカムイ》の村に行き《チャランケ》(談判) して、死んだ村人たちの魂を取り返してくるのだ。」と。何かと言いがかりをつけていたのは、雄弁になって《チャランケ》(談判) に勝つためでありました。そして、若者は村人の魂を取り返してきました。

全道各地にトコタンという地名があります。多くは、《トゥ・コタン》(廃村) という意味なのですが、浜益にある床丹には幾つかの説があります。《トッコニ・コタン》(マムシの村) と、《トゥ・コタン》(廃村)。このあたりはマムシが多く生息しています。実際には古い時代の竪穴住居跡なのですが、疱瘡によって廃村になった村という説もあり、先の物語と照らし合わせると、とても興味深いです。

タラバガニ (アイヌ語名：ホテムテム/アムシペ/タカハカ)

十脚目・異尾下目・タラバガニ科に分類される甲殻類の一種。食用に珍重され、分布域の沿岸では重要な水産資源の一つとなっています。

名前に「カニ」とありますが、ヤドカリの仲間です。和名は生息域がタラの魚場と重なることに由来しています。アブラガニと混同されることがありますが、タラバガニの甲幅は25cm



ほどでも、脚を広げると1mを越える大型甲殻類です。前身為短いトゲ状突起で覆われています。

釧路市春採には、むかしオタストウクルという男性が海に出てタラバガニをとったところ、カニが三味線を背負っており、これによって三味線がアイヌ社会に伝わったという伝承があります。

ハナサキガニ (アイヌ語名：フレアンパヤヤ/フレタカハカ)



エビ目・ヤドカリ下目・タラバガニ科に分類される甲殻類の一種。タラバガニの近縁種で食用に漁獲されます。名前に「カニ」とありますが、ヤドカリの仲間です。

甲幅・甲長とも15cmほどで、甲殻類としては大型ですが、タラバガニほどではありません。タラバガニよりも体のトゲが長く、脚は太く短いです。

和名の「ハナサキ」は漁獲地となっている根室の地名「花咲」に由来するという説が有力ですが、茹でたときに赤くなって花が咲いたように見えることから、という説もあります。

毛ガニ (アイヌ語名：アンパヤヤ／オテンパヤヤ)

エビ目・カニ下目・クリガニ科に分類されるカニの一種。甲殻類クリガニ科に属し、オオクリガニとも呼ばれます。水深 30 m から 200 m の浅い海の砂泥底に生息します。

体は全身が淡赤褐色で、体を覆う殻はあまり固くありませんが、短い剛毛が密生し、和名はこれに由来します。安産の神とする地域もあります。



07 住 む

伝統的な平地式住居としての《チセ》は、釘やネジを使わずに木の幹を柱とし、ヨシやカヤ、ササ、樹皮、割り板などを屋根や壁材に用いて作られました。こうした家屋は、戦前には新しい素材、構造の家に作り替えられて行きました。また、今日では消防法、建築法により、伝統的な素材で家を建てたり炉（裸火）を使用して生活することは難しくなっています。

《チセ》の中央よりやや入り口寄りに炉が作られ、家族の座る場所、寝るところ、調理をする場所、宝物や儀式の道具を置く場所などが決まっており、概ね二世帯（親子）単位で暮らしていました。炉では、火種を絶やすことはなく、夏でも炉内ではほのかに火を燃やしていたと言われています。火を焚くことによる地熱の上昇と、壁や屋根を葺くヨシやササが作る空気の層によって、《チセ》は外観から想像する以上に暖かく、一家団欒の場でありました。

こうした《チセ》は、復元されて現存していますが、実際にそこで人が生活することはなく、専ら伝承された儀式を行う場や展示施設として使われています。これにかわり、マンション・アパートや、戸建ての家を、《チセ》と呼び、建築の前後の儀礼を行うこともあります。《チセ》の間取りを基にした生活様式も変化しましたが、《カムイノミ》などの伝統的な儀式を継承する人の中には、現在居住する家で、伝統的な《チセ》での宝物の置き場所に倣って儀式の祭具を安置するなど、かつての住文化の一端が継承されています。

08 祈 る

◆精神文化

伝統的な世界観では、自然現象や動植物、人間の作る道具などのすべてに魂が宿り、それらは神の世界から使命を担って降臨すると考えます。その中には、人間にとって有益なものだけでなく、天災や病気などもあり、人間の力の及ばないもの・事象なども含まれます。

食べるもの、着るもの、住む家など、毎日の暮らしに必要な有形無形のものも多くを、豊かな自然の恵みの中から得ることから、人間生活は神から授かるものによって成り立つとも言えます。それに対し人間からは、返礼の意味で儀式《カムイノミ》を通じて祈りと供物を捧げます。神は、人間からの感謝を得て、一段

と位の高い神になると言われ、相互の協力が平和な暮らしを永續させるものと考えます。

日常生活の行動規範にも神の観念が反映しています。人間にとって最も身近な神は、火の神であるといい、何事も火の神を通じて儀礼が執り行われていました。火の神の住まいである炉は清潔に保ち、火から出た灰は、場所を決めて廃棄していました。生活様式が大きく変わった今日でも、こうした信仰やそこから生まれる習慣を民族文化の基本や人々の心のよりどころと捉え、アイヌ文化の継承、発展に取り組む人々もいます。また、様々な儀礼は世代を越えて継承や復活・再生がなされ、時には新たに創造もされて今日に及んでいます。

よく知られた儀礼として「霊送り」があります。クマ、タヌキ、キツネなどは、神の国に住む《カムイ》(神)が、動物になって狩人の元へやってくると考えます。人間は動物を獲ると、解体して神の荷物(肉や毛皮)を降ろさせ魂だけを天の国へ盛大に送り返します。この儀礼が霊送りです。

また、特に子熊を捕獲して1年～3年飼養してから送る儀礼を飼いグマ送りと言います。クマに対する儀礼は北半球に広く見られますが、飼いグマ送りは、アイヌ民族とニヴフ、ウイльта、ウリチといったサハリンからアムール川河口の一部の民族に限られる習慣です。

なお、本来は恵みをもたらすクマの神を迎えにいったとしても(つまり、狩にいった)、逆にクマに襲われて怪我をしたり、あるいは命を失うこともあります。通常のクマに対しては、人間が狩った後に新たな神として復活するための祈りをあげますが、人間を殺したクマは悪神として、二度と復活しないように祈ります。

その他には新春を祝う、豊漁を願う、狩の無事を願う、結婚の報告、葬式や誕生の報告、新しい鮭を迎える儀礼、古くなって使えなくなった生活用具を神の国へ送る儀式、新築安全祈願などがあり、一年を通じて様々な儀礼が行われてきました。

〈出典〉

- ・アイヌ民族博物館監修『アイヌ文化の基礎知識』(草風館 2018)
- ・北海道立アイヌ民族文化研究センター編 ポンカンピソッ5 アイヌ文化紹介小冊子『祈る』
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/abc/hacrc/hp/05_005.htm